ことぶき「なか」だより
No.188
2018.11

発行所　日本キリスト教団　なか伝道所
〒231-0026 横浜市中区寿町 3-10-13 金岡ビル 203/205
Tel.（045）671-1109
振替　00200 － 1 － 47369　E-Mail : naka-ch@hb.tp1.jp
http://w01.tp1.jp/~ja6694550
発行者　堀江有里　（題字　松橋 順）

宣教方針
① 貧しい人々への福音に共にあずかる。
② 地域の問題に関わる。
③ 諸教会に呼びかけてゆく。

集会　主日礼拝　日曜日　午前 10 時 30 分より

聖餐式のあり方について

発題　北村慈郎牧師

なか伝道所では、長らく毎礼拝後に、受洗の有無に関わらず参加者全員と愛餐式の時間を持ってきたが、その方法や目的について見直そうと話し合いを重ねている。今回は北村慈郎牧師をお招きし、船越教会での事例をご紹介いただきながら、聖餐の歴史的変遷や意義などについてお話を伺った。

○船越教会での聖餐

船越教会では、現在年五回（三つの祝祭日、イースター、ペンテコステ、クリスマスと、八月第一日曜日の平和主日、十一月第一日曜日の永眠者記念礼拝）聖餐を行っています。

そこで使用されている式文は、司会者と礼拝出席者が交読文のように応答を行う形式となっています。そして最後に、聖餐のパンとブドウ酒に与ります。式文は聖書のさまざまな箇所を典拠としたイエスの福音に対する教会側の応答という側面が強いと思います。

○聖餐の意義とその変遷

聖餐について現在に繋がる問題意識が起きたのは、恐らく一九六〇年代後半からだと思います。当時、批判的な聖書学の成果として、聖餐の起源は主の食卓、つまりイエスの食卓共同体という面が非常に強いのではないか、という研究が出てきました。伝統的な聖餐の見直しです。

同じ時期に、象徴としての聖餐の重要性の再発見が起こります。カルヴィニズム的な信仰観が支配的だった日本の教会の礼拝は、説教中心の礼拝となっていて、そうした状況を「讃美歌付講演会」と揶揄する人もいました。リタージカル・ムーブメントの世界的な盛り上がりを受けて、説教中心だった当時の礼拝スタイルが見直され、説教と聖餐両方が行われることが望ましい、と考える人が生まれてきたのです。こうして、一九七〇年代に入ると、聖餐式を毎週行う教会も出てきました。

一方、キリスト教世界であったヨーロッパでは、他宗教の人々が増えてきて、キリスト教も他宗教と共に一つの宗教に過ぎないという状況が生まれ、キリスト教を相対化する動きが起きています。そうした多文化共生社会における教会では、聖餐もキリスト教徒だけに許された特別なものではなく、誰にでも開かれたものであるべきだとする考えが現れてもおかしくありません。特に、キリスト教が他宗教のなかに入っていったアフリカ、アジア、南米などではそのような考えが生まれているのではないでしょうか。北米の合同メソジスト教会やカナダの合同教会なども、聖書の知見と共にこの動きを受けて聖餐を開いています。

○象徴行為としての聖餐

戦時下の教会で行った聖餐と現代の教会が行っている聖餐の連続性と不連続性について言えば、儀式としての聖餐は象徴行為ですので、それ自身をどう受け取るかということは、その聖餐の行われている教会で語られている説教の内容や宣教の方向性と密接不可分だと思われます。ですから、同じ行為である聖餐も、それぞれの教会によってその教会の説教の内容と宣教の方向性が違えば、聖餐も教会によって実質的な違いがあるのではない

でしょうか。また同じ教会（なか伝）のメンバーでも、一人一人によって聖餐の受け止め方が違うということも起こり得ます。

言葉ではなかなか伝えづらいことが、パンを食べブドウ酒を飲むという非常に具体的な体の行為によって実感としてわかる。象徴行為の優位性というものがあると思うのです。もしカトリックのように内在のキリストを信じるとすれば、パンとブドウ酒は祝福されると実際のキリストの体と血になるわけですから、それを食べることでキリストが自分の内に生きているということになるわけです。それは非常に実体としてわかりやすいじゃないですか。しかも具体的に感じられるわけです。

ただそれは、場合によってはいかようにも受け取り手によって解釈されてしまうという側面も同時に持っている。聖餐を受ければ幸せになれる、といった具合に呪術的に受け取っている人がいなくもない、ということです。

そういう点で、戦時下の教会では憲兵に見守られて説教をして、宮城遥拝して、朝鮮半島の教会には神社参拝を強要していたわけです。戦争に行く者には戦勝を祈願して送り出していった。そこで語られていた言葉は聖餐と密接不可分であって、恐らく聖餐も戦争協力のために大いに使われていたことは、当時の教会としてありうるわけです。こういう歴史を持つ日本基督教団の教会が現在行っている聖餐は、当時の聖餐とどう違うのか。かつての戦争協力をしていた聖餐が過ちだとするならば、その過ちをどう克服して、現在どのような聖餐をしていくのか。こうしたことが問われてしかるべきではないかと思います。しかし、それに対してはほとんど問題化されていないというのが現実です。

聖餐について考えるとき、単にどのような形式の聖餐をすればよいのかと考えるだけでは不十分です。私たちが行う聖餐が、現代という社会的な文脈のなかでどのような役割を発揮してしまうのかという点も含んで考えないと、なかなか厳しいのではないでしょうか。この問題は私たちの現在の課題として考えていかなければならないと思っています。

○質疑応答や感想から

Aさん・「なか伝」では当初、非常にカジュアルな形で愛餐式を始めたが、礼拝参加者が増えていくなかで様式化していった面がある。

Bさん・何となく礼拝に参加し愛餐式を行って、ただ「一週間の力をもらいました」という感じにするのではなく、そのときどきの社会と向き合って、時流に流されていないかと自分に問いかけながら参加していきたい。

北村牧師・おっしゃる通りだが、人間は常に目覚めていくというのはなかなか難しいところがあって、慣習のなかに埋没して生きていくほうが楽だし、どうしてもそうならざるを得ない部分があるのも事実ですよね。そうしたことを踏まえて、あまり先鋭的になり過ぎずに、でも考えていくことは大事なことです。そして、例えば聖餐式の式文のなかに思索の一端が言葉化されて示されていると、あのときみんなで議論したなと、思い起こすことが自然と成り立つということになります。教会は構成員が流動化していくものですから、なおさらこうした確認作業が重要になってくるのです。

Cさん・聖餐は象徴行為であり、受け手次第でいかようにもなるという話を聞いて、しっくりくると同時に、「なか伝」で礼拝・愛餐式に参加する自分の責任をずっしりと感じた。今後も堀江牧師とシンプルな愛餐式とは何か、いっしょに考えていきたい。

Dさん・私は「在日」なのですが、日本に植民地支配されていた時代の朝鮮半島で、神社への強制参拝に反対して殉教した牧師のご子息とささやかな交流があった。殉教していった人たちが守っていた聖餐を想像するとすごいものがあったと思う。聖餐の意味は時代に規定されてしまうという今日のお話は、まさにその通りだと感じた。

北村牧師・殉教された側の聖餐について思いを馳せると、当時日本が行っていた聖餐の内実は極めて対照的なものだったと思うのです。残念ながら、戦時下は戦争協力を批判的に抵抗する力がほとんどの教会では足りなかったという歴史を持っています。これから日本がどうなっていくかわからないわけですから、どういう形の聖餐を守っていくべきなのか、きちっと国家に対する態度を明らかにしておかないと、国家や時代に飲み込まれて、また第二次世界大戦のときと同じ過ちを犯してしまうと思うのです。

（まとめ　幸前一元）

風　景

最近突然、東村山にあるキリスト教図書出版社から一冊の本が届いた。私はこの本を頼んでいない。一週一言「私のアメリカ留学記」と題する関田寛雄牧師の本である。二〇一八年八月一〇日発行とあり、まだ出版して間もない。一頁一頁ありがたく拝読して数日後、現金書留で本代を送金した。こんな貴重な関田先生の本を読めるだけでも感謝である。

はじめに「キング牧師のこと」と題して始まるが、キング牧師に励ましの手紙を送りその返信をもらっている。その文中に桜本教会の開拓に五年、会堂が出来て二年とあり、続いて、深夜二人の子供を連れた母親が、父親が酒乱で刃物を振り回して危ないから泊めてくれないかと現れたという話が出てくるが、この母子は、池上町（当時、桜本三丁目）に住む在日朝鮮人一家であったとある。

私は桜本二丁目で生まれたが、当時、朝鮮人の多く住む池上町は地獄の三丁目と呼ばれていた。当時の桜本教会は我が家のすぐ裏手にあった。直線距離で煉瓦工場を挟んで三〇メートルほど。このお隣で煉瓦工場を営む真保（しんぼ）さん一家はクリスチャンだった。背の高い娘さんがいて、姉と三人で撮ってもらった写真がある。この桜本教会に姉と何度か通った覚えがある。幼いころの思い出である。よく声をかけていただき、何と優しい人だろうと思った。その印象は今も変わりなく、私の中で重なっている。

（郭鐘洙）

使信

〈希望〉の困難と可能性

堀江有里

このように、わたしたちは信仰によって義とされたのだから、わたしたちの主イエス・キリストによって神との間に平和を得ており、このキリストのお陰で、今の恵みに信仰によって導き入れられ、神の栄光にあずかる希望を誇りにしています。そればかりでなく、苦難をも誇りとします。わたしたちは知っているのです、苦難は忍耐を、忍耐は練達を、練達は希望を生むということを。希望はわたしたちを欺くことがありません。わたしたちに与えられた聖霊によって、神の愛がわたしたちの心に注がれているからです。

（ローマの信徒への手紙五章一～五節）

■パウロの語る希望

ローマという当時の世界の「中心地」とも言える場所に訪れたいと願っていたパウロ。パウロはそこでイエスの事柄――福音――を信じている群れと出会いたいと願っていました。その思いが託されたロマ書は、パウロの饒舌な信仰告白でかたちづくられています。

あるときには、自分は市民権ももっているし、「生粋のユダヤ人」であることを誇り、しかしまたあるときには、ユダヤ人以外にも福音は訪れるのだと語るパウロのゆらぎが時代と文化を超えて、わたしたちのもとへと届けられてきました。わたしたちは、いま、そのパウロの思いとどのように向き合うことができるのでしょうか。

本日与えられているパウロの言葉には「希望」が語られています。パウロは掛け値なしに「希望」を語るのではなく、「苦難」をも誇りとすると述べています。「苦難」にとどまりつづけているあいだもいつかは出口があることを先取りして知っている。それがパウロの信仰告白だからです。

■イエスの福音と抽象化

しかし、気をつけなければならないのは、パウロが語る「希望」は読み手によっていかようにも解釈できてしまう危険性です。パウロの言葉は、教会という制度が生み出されていくなかでさまざまに読まれてきました。具体的なイエスの出来事を抽象的に解釈するために利用されてきたのも事実です。

イエスは、ある金持ちの青年との出会いのなかで「金持ちが神の国に入るよりも、らくだが針の穴を通る方がまだ易しい」と語ったとされます（マタイ福音書十九章二三節）。また、イエスの言葉ではないですが、ルカ福音書の記者はイエス誕生に際して、「マリアの讃歌」を位置づけ、「権力ある者をその座から引き降ろし、「富める者を空腹のまま追い返されます」と宣言しています（ルカ福音書一章五二・五三節）。

ここに描かれているイエスの姿は「偏愛」ともとれます。世の権力や富などに恵まれた人びとの側には立たない、という宣言のようにも読めるからです。

しかし、それでも教会で礼拝を守るという行為において、御言葉を取りつぐ役割を与えられている者は、まずもってすべての人びとに「希望」が与えられること、あらゆる人びとに「神の恵み」が降り注ぐことを語るべきだという規範が、ときに、求められます。イエスとパウロの〈あいだ〉。わたしたちは、その溝を簡単に埋めてしまうことなく、立ちとどまり、そこで考えつづけることはできないものでしょうか。

■東京五輪の作為的な「希望」

いま、神奈川県のあちこちでも、二〇二〇年に向けての準備が進んでいます。東京オリンピック・パラリンピック（東京五輪）です。五輪にはさまざまな問題が伴います（詳細は「オリンピック災害」おことわり連絡会のサイトに紹介されています。→ http://www.2020okotowa.link/）。野宿者の追い出しや小学生など子どもたちの動員。国別の対抗試合のなかで

えーとねえ

みう　「明日の給食、タコライスなんだよね。
　　タコあんまり好きじゃないよ！」

ママ　「タコライスってタコ入ってないんだよ」

みう　「えー！　そうなの？　ああよかった」

（翌日は安心して学校に行けた）みう　六歳

ナショナリズムも煽られます。

日本政府は、戦後「復興」として前回の東京五輪（一九六四年）を位置づけました。そして二〇二〇年は東日本大震災からの「復興」五輪であると喧伝しています。しかし、招致に関わる「裏金問題」の報道（英国「ガーディアン」紙）や新国立競技場のデザインや建設にまつわる事柄をはじめとして、さまざまなスキャンダルがつづいた結果、「熱狂なき盛り上がり」という現実世界での空気のつくられ方があると、社会学者の阿部潔さんは指摘しています。その空気のつくられ方を、阿部さんは「為政者やメディアによって演出される今日的な〈希望〉はきわめて作為的だが、人々はそれをうすうす感じ取ったうえで、あえて受け止めるというシニカルな態度である」といいます。

なぜ、それでもなお、人びとは作為的な「希望」を支えてしまうのでしょうか。阿部さんはつぎのようにつづけます。

現実にはたらきかけて未来を変えることがどこまでも困難であることを十分に自覚したうえで、あえてそれを望む心性がそこに見え隠れする。そのように人々を突き動かす動因とは、とにかくも「未来に希望がある」こと自体を希おうとする心情ではないだろうか。希望への希望＝〈希望〉とでも呼ぶべき不可思議な倒錯がそこに見て取れる。

（阿部潔、二〇一八、『２０２０』から『１９６４』へ――東京オリンピックをめぐる〈希望〉の現在」小路田泰直ほか編『〈ニッポン〉のオリンピック――日本はオリンピズムとどう向き合ってきたのか』青弓社、二一二頁）

■「希望」を願う心性

教会にはさまざまな背景をもつ人びとが集まります。どのような規模であれ、複数の人たちが集まるとき、そこにはそれぞれの人びとが生まれてからのあゆみと、日々の生活のなかでの体験などを含め、かならず〈異なり〉が存在します。キリスト教を信じる人びとにとって、「イエスは主である」という共通理解（＝信仰）は前提としてあったとしても、なかなかそのほかの点で一致することは難しい。しかし、だからこそ、パウロがゆらぎつづけて、それでも強く言葉を紡ぎ出したように、多様な考え方のなかで逡巡する可能性が、わたしたちには与えられているように思うのです。安易に一致だけを求めることが「希望」ではないことを、わたしたちはそこから学ぶことはできないものでしょうか。

まど

▼災害つづきの夏でした。豪雨や台風、地震などの被害にあわれた方々に心よりお見舞い申し上げます。いまも日常への〈回復〉途上のなかにある方々のことを覚え、なか伝道所でもお祈りをつづけています。

▼長年、大阪・釜ヶ崎の諸活動にかかわってこられた小柳伸顕さんより前号の使信について、日本が近代化のプロセスにとった「拡大政策」の矛先としてアイヌモシリへの侵略（北海道）が欠落しているのではないかとご指摘をいただきました。文献からの引用でしたが、きちんと立ち止まって検証することなく通り過ぎてしまったことを読者のみなさまにお詫びいたします。お恥ずかしい限りです。小柳さん、ありがとうございました。小柳さんをはじめ、遠方から通信への応答を毎回送ってくださる方々がいらっしゃいます。お力添えとお支えに心より感謝いたします。

（堀江有里）

編集後記

今回の特集のテーマは、信仰の深い部分とも関わる微妙な問題で、少し自分には手に余る内容かなぁ、と最初は身構えていました。でも、北村牧師に大変わかりやすくお話していただき、そして丁寧に校正していただいたおかげで、読みやすいものになったかは別にして何よりもこの問題に関する私の理解を深めることができました。貴重な機会を与えていただき感謝しています。（元）